

境界文化考—遊牧と農耕—

豊田 謙二 (熊本学園大学)

序

モンゴルの草原，そのどこまでも続く緑の絨毯に設けられた「ゲル (=Γᠡᠮᠤ)」を横目にながめつつ，5歳の男の子に草を引くなと注意されたところである。ここは，中国の公称では「内蒙古自治区東北部満州里市」である。内蒙古は英語表記で，「the inner Mongolia Autonomous Region」となるが，モンゴルの人には「蒙古」の表現を嫌う。以下，「モンゴル」と表記したい。なお，「満州 (=Manzhouli)」は本来土地の名ではなく，「種族の名。中国東北部に住んでいたツングース族」，⁽¹⁾つまり清朝を興した「女真族」を称していたという。

内モンゴル自治区は，中華人民共和国内の北部にあり，西に同族民の「蒙古 (=モンゴル国)」と接しつつも，政治的に分断された歴史を持つ。満州里市の北ではロシアとの国境が鉄筋で区切られている。島国の日本では，海のなかの見えない国境に思いを起こさねばならないが，ここでは境界は厳然としてその位置を示している

市内にはロシア人をよく見かける。市街地にはロシア料理の店もあり，西欧料理も提供している。市の郊外には木材の製材工場が立地する。モンゴル人の雇用の場と思いたいが，モンゴル人は低賃金とされ不人気という。その木材はロシアで伐採され，ここで製材，そして大連市経由で日本に輸出されるという。モンゴル人と日本人とは，何と，現在，このようにしてつながっている。

私は1012年9月12日，山西省太原空港から北京経由で満州里空港に到着した。

(1)



写真一 1 ロシアとの国境 (撮影：豊田謙二)

その空路は、匈奴など北方民族と漢族との間を境界づける、かの「万里の長城」を超えるのである。

秦漢帝国の中国統一と領土拡大は、この遊牧世界との境界までくると止まってしまう。そしてその境界に万里の長城を築いて、匈奴の強大な勢力と対決することになりました。⁽²⁾

周知のように、秦の始皇帝は漢族による初めての統一国家を樹立した。紀元前221年のことであった。彼は、さらに万里の長城を修復し、北からの攻めへの守りを強化したのであった。当時の秦の北には、^{きやうど}匈奴、^{きやう}月氏、^{てい}西に羌、^{てい}氏、南には^{てん}填、というように、統一はしたものの諸民族への脅威はなお消えてはいなかった。多民族と漢民族との抗争・協調は現在にも続くが、中国地域を征服した過去の北方民族は、以下の通りである。

- ① 北魏 (386-534) ^{せんび}鮮卑 (モンゴル系?)

- ② 遼 (契丹^{きつたん}) (916-1125) キタイ (モンゴル系)
- ③ 西夏 (1038-1227) タングート (チベット系)
- ④ 金 (1115-1234) 女真 (ツングース系)
- ⑤ 元 (1271-1368) 蒙古 (モンゴル系)
- ⑥ 清 (1636-1912) 女真 (ツングース系)

さて、小論では「遊牧の民」モンゴル族と「農耕の民」漢族を、諸点において比較しながらその相違を明らかにしたい。その比較文化の焦点、つまり中心的テーマとしての「住むこと」に収斂しながらも、その関連する生活領域は広い。「広い」というよりも生活そのものと言っていいかもしれない。そこで前者と後者とのあいだに極めて大きな、しかも重要な相違が発見されるであろう。つまり、前者は「移住」、後者は「定住」を基本の生活形態としているということである。建築家の渡辺武信は、その住宅に関して以下のように言う。

住宅は「時を経たせる」場所だと思います。それもできれば豊かに経たせたい。豊かにとはどういうことか、というと結局「ただ居る」ということで、住宅で一番大切なそれができるかどうかでしょう。⁽³⁾

渡辺は、「ただ居る」場とは、私の物によって囲まれた場である。そこには、私の匂いでもある馴染みが愛着を形成している。そして、渡辺はさらに重要な指摘をしている。

「ただ居る」場はどのようにつくられるのか。それは一言で言うと「囲う」ことなんですね。別の言い方をすると、居る場所をそれ以外の場所と区分する。⁽⁴⁾

というように設問を続けると、次は、「囲う」とはなにかと問うことになる。モンゴル族の「囲い」はゲルである。漢語では「パオ＝(包)」と呼ばれる。漢

族では「民居」と呼ばれる住居がそれに相当すると思われる。その比較文化的考察のためには、モンゴル民族が漢民族文化の拠点たる江南地域を征服し、「元」朝を興す過程に即してモンゴル族対漢族との拮抗から考察を始めたい。



写真一2 草原とゲル (撮影：豊田謙二)

2. モンゴル民族の世界帝国

1206年 モンゴル帝国の成立

1271年 元朝の世界帝国

モンゴル民族は世界帝国の樹立によって、世界史上に輝かしく、そして荒々しく登場した。最盛期での世界帝国の版図は、東は朝鮮半島を制圧するが日本列島への2度の遠征には失敗、南は陳朝大越国ちんちようだいえつこくの強い抵抗に遭い挫折、西ではホラズム王国を滅ぼした。1218年チンギス・カンの国書、贈与品と500頭の馬を携えた450人の使節、その全員がホラムズ王国のオトラル総督に処刑された。その報復戦の始まりであった。

「抵抗する都市は徹底的に破壊され、抵抗するものは虐殺される」⁽⁵⁾

それはチンギス・カンの戦術であり戦略でもあった。1219年に通商の中継都市オトラル、イスラム宗教都市ブハラが墜ち、モンゴル軍はホラムズの王城のあるオアシス都市サマルカンドを包囲した。

モンゴル軍の構成は、兵士10万人、その一人の兵士に馬5頭、従者2人、荷車1台、羊30頭が伴う。とすれば、従者20万人、馬50万頭、羊300万頭が西方へと従軍したのである。さらに、家族が「ゲル」とともに従った。生活することは戦うことであり、戦時組織は移住組織にほかならない。兵士は替え馬を引き連れたままで、「立ち鞍」の騎乗で、しかも直立姿で馬を操り、短弓から強い矢を発射する。モンゴル人の狩猟の延長が戦いである。都市の住民が降伏・退城後、イスラム寺院に立てこもった兵士を皆殺しした。その後チンギス・カンは、7年振りに、1222年ヒンドゥクシュの山中に戻り、1227年遠征地の西夏を滅ぼした。この年、彼は中国寧夏回族自治区六盤山麓に没し、側近は「死」を隠したまま、その遺体をモンゴル草原にもち帰ったのである。

そして、息子のオゴデイ・カンは1241年にワールシュタットの戦いでドイツ・ポーランド連合軍に勝利し、西欧人に「モンゴル軍」の強烈さを焼きつけて、ユーラシア大陸を圧倒的な軍事力で横断的に制圧した。その世界帝国は東西の国々をつなぎ、その元朝が商業的なイスラム民族を保護したこともあり、東西商業の拡張を促すこととなった。

漢民族を含めて、他の民族がなし得なかった世界帝国の建設、それをモンゴル民族がなしえた要因はなにか。その要因を探るなかで、モンゴル人の特性を引き出すことができるであろう。だが何よりも、世界帝国の基礎を築いたのはチンギス・カン、この神秘的でさえある有能な指導者、その出自にまずは注目しなければならないだろう。『モンゴル秘史』によれば、以下の次第である。

ホエルン夫人は身重になっていて、オナン河のデリウン岳にいたまさにその時に、チンギス・カハンが生まれたのであった。生まれる時、右手に碑石のような血ごりを握って生まれた。⁽⁶⁾

その誕生の日は、1155年、62年、67年の三説がある。67年説が有力というが、その根拠は「諸事件と年月日がよく合致する」⁽⁷⁾からという。父イエスゲイ・バートルはその日、タタル族の領袖テムジン・ウゲとヨリ・ブカを捕えてきたところであった。モンゴル人の慣習では、新生児の誕生の際母親ホエルンが最初に目にしたものが、その子の名になる、と言う。「テムジン」の名はそうして付けられた。

テムジンの母ホエルンは、イエスゲイが兄と弟とともに、メルキト族に嫁す時に略奪されたのである。健康で多くの子どもを出産できそうな女性が「略奪」の対象となる。それは遊牧民族にとっての生産的行為である。だが、略奪された女性の心情は如何ばかりであろうか。

鳴きながら鳴きながら家畜になり、泣きながら泣きながら人になる⁽⁸⁾

テムジンの父はキヤト族の族長であったが、タタル部族によって毒殺され、「従祖父にあたるアンバガイ汗はタタル部族の人狩りの犠牲になって殺された」。⁽⁹⁾ イエスゲイが死去すると人は去り、生活はドン底、しかもテムジンは常に刺客に狙われ、メルキト部族に妻も奪われていた。テムジンがモンゴル人のなかで頭角を表すのは、妻のボルテを奪回したときからであろう。

遊牧の生活は常に孤立化と収奪のリスクを負う。「ゲル」を背負い移住する自由には、小集団での行動に制約され、人間関係の拡がりの難しさを伴う。だが、盟友との関係づくりには、「アンダ」人になる、という仕組みがある。お互いに物の交換によって「アンダを誓う」のである。

アンダ人（びと）とは、生命（いのち）一つで相捨つることなく、[常に] 生命の守りとなり合うものぞ⁽¹⁰⁾

モンゴル人は文字を持たなかった。モンゴル帝国後において初めて文字の意義

を意識し、ウイグル語を基礎にモンゴル語を整え、そしてモンゴル人による帝国史を残した。『モンゴル秘史』である。それを指揮したのはチンギス・カンである。1206年にクリルタイ（大集会）が草原のなかで開催され、テムジンが「チンギス・カン」として、モンゴル国の「カーン=皇帝」の最高位についた。

クリルタイ、それはモンゴル人の最高の決議機関である。このメンバーはチンギス・カンの血縁王族、遊牧地を委託・任命された部族長である。ここで、最強軍団たるモンゴル軍事力、つまり組織について顧みなければならない。その基本序列は、皇帝（=カン）・万人隊長・千人隊長・百人隊長・十人隊長という指揮系統によって構成されている。⁽¹¹⁾いわゆる、「千戸百戸制」という新たな軍事組織、と同じに居住組織組織として編成されたのである。⁽¹²⁾

さて、この「モンゴル人」とはだれか、という問いが生じる。

森の民を除いた外のモンゴルの国民、つまり北方の森林種族以外の、モンゴル高原に住むすべての遊牧民を包括的に指す。⁽¹³⁾

チンギス・カンはモンゴル人のなかの氏族間での対立・敵対者、まず父を毒殺したタタル族、妻ボルテを奪ったメルキト族を退け、21部族のリーダーとして「かかん可汗」の位に就く。戦いに勝利するには戦力が豊かでなければならない。有能な人材を味方に引き寄せるには「贈与」が欠かせない。そのためにも新たな財を確保しなければならない。チンギス・カンはクリルタイの承認を得て、1210年からほぼ半世紀にわたる1260年に至るまで西方への遠征・略奪を続けたのである。⁽¹⁴⁾

「千戸百戸制」は軍事組織にして、モンゴル人の相互扶助組織である。移動は「ゲル」4～5戸の小単位で、家畜を率い、馬車にゲルを積み込んで行う。草原で遊牧するにもルールは必要である。ルールを堅持するには権力をみとめなければならない。チンギス・カン、部族を統率できる強力なリーダーの誕生である。

3. 遊牧と農耕

1227年、チンギス・カンが西夏を滅ぼす。彼は、金を責めるに南宋の力を借りよ、と遺言したという。⁽⁴⁵⁾チンギス・カンの跡を継いだのは、息子の太宗オゴデイである。1234年の金の滅亡から、さらに南宋が滅びるまで、実に45年を要したのである。

そのオゴデイが1241年に死亡、1248年のクリルタイの後、チンギス・カンの孫の二人、フビライは東アジア、そしてフラグには西アジアの所領が託された。フビライは、1271年に国号を「元」と称した。これによって、フビライは、モンゴル帝国の「汗＝カン」であるとともに、中原帝国、名実ともに元王朝の皇帝となったのである。⁽⁴⁶⁾フビライ・カンは、金連川（きんれんせん：内蒙古自治区）に城郭を構えた、それが「開平府」と呼ばれ、後に元朝の「上都」、夏季の首都とされた。また、首都は北京、元朝では大都と呼ばれた。

モンゴル人はこうして「万里の長城」、つまり北方民族と漢人とのあいだに設けられた境界を超えた。その境界は、漢民族の造営した遊牧と農耕との境界でもあった。「万里の長城」は最低でも高さ約2mの壁によってその二つを隔てたが、モンゴル人の農耕文化への侵攻によって、その「境界」は「支配者」と「被支配者」との境界という関係に転回した。ところが、「支配者」なるそのモンゴル人の政府要人は、なんと夏季になると大挙して草原へと旅立つのである。草原は永遠のあこがれなのであろう。

遊牧

遊牧は放牧とは異なる。松井健によれば「遊牧というのは、遊動的牧畜」⁽⁴⁷⁾である。つまり、牧畜は生活様式の一つであり、家畜の飼育を基盤とする生活である。だが「遊牧」とは、飼育を生計の基本としながら住居を移動することである。もちろん、地形的に言えば遊牧の民は、北アフリカ、西南アジア、そして中央アジアなどにおいてそれぞれの文化的特性を有している。

ここでは、東北アジアのモンゴル人に関する遊牧文化を対象としている。その



写真—3 草原と羊（撮影：豊田謙二）

特性を明らかにするために、まずは、年間の季節的な生活様式を検証してみたい。議論をやや先取りしていえば、春夏秋冬、という1年の季節の循環のなかでもとりわけ冬の季節が極めて過酷である。戸外の気温は零下30～40度にも達する。その過酷な自然のなかでさえ放牧の仕事は続けられる。極寒の冬を越すことが家畜にとっても、牧人にとっても生命の係る最重要な課題だからである。冬営地においても毎日羊の放牧が必要であり、宿営地にはフェルトを掛けた柵を設け、そのなかには1年以上前から乾燥させた羊の糞が敷かれている。こうした設備によって初めて羊が越冬可能なのである。放牧ではできるだけ遠くまで連れて行きたい。ゲルの近くの牧草は猛吹雪の際の備えとして残しておきたいからである。といっても、ゲルからおよそ2キロまでが限度であるという。それ以上遠くまで行くと冬営地に戻れなくなるからである。この冬営地には約4ヶ月止まる。⁽⁸⁾

春は羊の出産時期であり、親族関係中心の「アイル」という協働によって乗り切る。春営地の滞在は2ヶ月程度であるが、40～50日間に約400頭の羊が誕生する。家畜の特性を知らない私にとって衝撃的なのは、その羊へのケアである。な

んと、「母羊たちは自分の生んだ仔以外には乳をふくませない習性」⁽¹⁹⁾なのだ、という。モンゴル人は、それぞれの母羊と仔羊とを固体識別できる能力を有し、それぞれの親と子をつなぐのである。

冬・春・夏、それぞれ比較的長く宿営地に留まる。その所以は、羊の群れを成長させ太らせるという合理的理由から生ずる。つまり、羊の頭数により、宿営地での滞在期間、仕事内容などは毎年規則的に循環されることなのである。ただし、秋の季節は極寒の冬に向けた準備の時となる。この時期こそまさに「遊牧」の季節と言えよう。この頻繁な移動は「オトル」と表現されているが、例年8月初めから約40日間を指している。

なぜ頻繁に移動するのか、まさに羊の側の理由である。羊は夏季には豊かな牧草を食み、肥え太る季節である。夏季に羊が太るだけでは不十分なのである。この点が実に興味深い。つまり、夏の「水脂肪」を「油脂肪」に転換しなければ冬の厳しい寒さを超えられないというのだ。そのためには、実を結ぶ牧草、「ミングル草」などのような実をつけた草を求めて移動を続けるわけである。⁽²⁰⁾

小論の冒頭で、「草を抜くな」という子どものメッセージを紹介した。草は大地のもの、その草も駱駝・牛・馬・羊など動物によって草の好みは異なる。草は自然の循環のなかで食され、また生育する。草は抜いてはいけな^いのだ。その対極に農耕がある。『漢語林』によれば、「農」「耕」のいずれにも「たがやす」とあり、「耕」にはさらに「田畑の土をすきかえす」と説明される。耕地づくりとは、草を、正しくは雑草を抜くことに始まる。ここに、「遊牧」と「農耕」との鋭い対立がある。「遊牧」については、すでにふれた。以下には「農耕」に関する、当時の宋・元朝での農耕の状況を略述してみたい。

農耕

遊牧民族に対峙した時、「農耕」を基本的営みとする人々は、自己を「文明人」と自負し、同時に「遊牧」を蔑視する。農耕に依拠する漢人は、遊牧の民を「夷^{てき}狄」と呼称したが、「夷」とは東方、「狄」は北方での未開の民を指す。ここでは

「農耕」を「遊牧」との対比性において整理し、比較文化的考察を試みてみたい。

人類の起源に立ち返ってみると、その生活の基本に「狩猟文化」を発見する。だが、狩猟は自然資源の多寡に全面的に依存するだけに、食物の確保においては極めて不安定であり、絶えず飢餓の危険に晒されていたのである。その絶望的な長い時間の経過のなかで、食材のすべてを消費せずに「貯蓄」すること、つまり「所有」の発見が全く新しい文化へと誘うのである。種子を保存し土地を耕して栽培する、いわゆる「栽培植物」の開発である。雑草は人類が食べられない。「セルロース」、という植物繊維が人類の消化を阻むからである。ここに栽培植物を育て・食す農耕文化の積極的な意義が誕生する。栽培植物学の先達中尾佐助はその栽培植物と農耕文化に関して以下のように言う。

農耕文化の文化財といえ、農具や技術の何よりも、生きている栽培植物の品種や家畜の品種が重要といえよう。農業とは文化的にいえば、生きている文化財を先祖から受けつぎ、それを育て、子孫に手渡していく作業ともいえよう。⁽²¹⁾

さて北方・東北地区では、その「農耕」はいつ始まり、漢人においてどこで、どのような農耕が展開されていたのか、その経緯の一端を探ってみたい。

農耕は地球上のさまざまな地点で、まったく独立的に開始されたようである。遊牧が常態であった時代に、トルコにおいて畠を領有し耕作が開始されたという。それが約1万年前のこと、紀元前5千年ごろには東南アジアの移動農耕民がバナナなどの樹木を育て始め、約千年後に中国の黄河流域で土地の領有と栽培植物の耕作が始まった。⁽²²⁾

農耕は南の地域に始まり北へと進展していった。温帯モンスーン地帯では、広葉樹の林とそこに育つ動植物の群生、および西方から受けとった雑穀類や麦、その複合として捉えられる照葉樹林文化が形成されたのである。⁽²³⁾

東南アジアの熱帯降雨林の中でおこった根菜農耕文化は北方に伝播し、温帯林である照葉樹林帯に到達すると、環境の変化に応じておのずから農耕文化基本複合の変化をおこしてくる。⁽²⁴⁾

集住は人が集まることなのであるが、それは同時に人と人との関係を築く。つまり、血縁関係のほかに集住に伴う地縁関係が形成されることである。最少単位「里」、さらにその間をつなぐ「郷」があった。古来中国には、城壁で都市領域が区切られていた。都市のなかには東西南北に「路」が走りその路に囲まれているのが「里」、その里のあいだにも壁があり、そこに人の通る小道「巷」が縦横をなし、その巷に沿って家屋が建ち並ぶ。里民は、里門から城門を抜けて耕作のために畝に通う。里内には中央の土地神「社」を祭る。民会や長老会はこの集住する人をつなぎ保身と防衛の核とするのである。⁽²⁵⁾

紀元前770年以降、秦の統一までを春秋戦国時代と呼んでいるが、その時代に農耕に鉄器の農具が導入された。石器から鉄器への農具の発展は、当然ながら農業生産力を飛躍的に引き上げたのである。

この時期に、地球的規模での人間の大移動が開始される。集住とはいっても必ずしも、いわゆる「定住」を意味しているのではない。むしろ人間は移住を、常に、どこでも繰り返してきたからである。多くの場合、それは民族間での激しい抗争に伴っていた。漢人に初めて対抗できる勢力を積み上げたのは、匈奴であった。紀元前200年、匈奴の王 ぼくとつぜんう冒頓単于は漢の劉邦を山西省大同において包圍、敗北させている。⁽²⁶⁾

「漢」滅亡後の三国(=魏・呉・蜀)時代(220-280年)を境に、東アジアでは様々な民族が国家の形成に向けた躍動を開始する。日本列島での「倭」の国の登場もその動向の一端である。東北を中心に「魏」、ついで「晋」、さらに「晋」の崩壊後には、北方民族がそれぞれ国を建ち上げる。それが「五国」であり、以降「五胡十六国」の混乱・移住の時代に突入する。漢人も北方民族の南下に伴い黄河を超えて長江流域までに南下する。その江南の地に国が建てられる。これ以降、漢

人による江南の開発が進展し、水稻・絹織物・鉄器などを産するのである。注目すべきことは、これ以降今日に至るまで、ここに中国における華北と江南という対立的な文化圏が形成されることになるのである。

さて、「漢」の時世に強大であったその匈奴は分裂し、一部は南下し華北に集住するのであるが、他の一部は西へと移住して、やがてヨーロッパに「フン族」として登場する。その「フン族」に押されて、ゲルマン系の西ゴート族がドナウ河を渡りローマ帝国領内に移住を開始（375年）し、各地での国家の形成を促すことになるのである。⁽²⁷⁾

このような多民族における地球規模での移住・定住過程において注目したい点は、移住においてはどの土地に住むにしても自由でありながら、その自由を守るために「国家」を形成し、そのことが移住を制限することになる。そこに政治的支配者の強力な意思が働く。住人は絶えず権力者の意思に怯えねばならなかったのである。

万里の長城

「万里の長城」は世界的に極めて著名な遺跡であるにもかかわらず、その名づけ親については不確かである。この小論では、「長城」として話を進めたい。

この「長城」は、巨大にして、長い歴史を積み重ねた境界である。「境界文化考」と銘打った小論ではあるが、「長城」そのものが境界であるという事実に触発されつつ、境界なるもののあり方について検証してみたい。

さて、かの「長城」そのもの、その何たるかについて『史記』からの文言を孫引で引く。

地（領土）は東は海（^{ぼっかい}渤海）および朝鮮に至り、西は臨洮・^{りんとう}羌中（^{きょうちゆう}甘肃省）に至り、南は北戸（ベトナム）に至り、北は河（^か黄河）のよって^{とりで}塞を^{つく}為り、^そ陰山に並いて遼東に至る。…⁽²⁸⁾

長城の西は臨洮^{りんとう}、現在の甘肅省蘭州市の南という。そこから東へ、遼東は遼東半島の接する北部辺りという。現在はさらに西へと延び、蘭州市の北西部の西域に入った酒泉市が起点となる。東から西へと黄河を大きく迂回して巻き、その総延長は約「一万里」である。陳舜臣によれば、長城は山岳地帯の起伏に富む地形を走り、場所によると二重や三重であることも考慮すると、総延長は約5,000キロにもなるという。⁽²⁹⁾

その長城の造営は、紀元前の戦国期、およそ2,300年前に遡り、当時「燕^{えん}長城」や「秦長城」と呼ばれた長城が築造されていた。それ以降、補修や延長で積み重ねられ明末までその造営は継続されてきた。地方の方々から強制労働を駆り集められた、膨大な人たちがその辺境の地で虐げられた。秦始皇帝は約30万人を過酷なこの地での労働に充てたという。⁽³⁰⁾

かの長城の造営はかくも多くの犠牲を強いたのであるが、その長城にはどのような役割が課されていたのであろうか。その考察には、匈奴などの北方民族の活動と漢民族との関連を洞察することが何よりも重要と思われる。まず、堀敏一の記述を紹介しよう。

戦国・秦・漢では北方の遊牧騎馬民族として、中国をさかんに侵略いたしました。戦国諸国は北辺に長城を築いてこれを防ぎ、それが秦代に万里の長城になって、中国と外国とを分かち国境になりました。そして長城外には匈奴やのちの朝鮮諸族が住んで、中国と交渉を持つことになりました。⁽³¹⁾

この堀説は「北方民族防衛説」として理解しておきたい。次いで、植村清二の「万里の長城」に関わる所説を紹介する。

黄河に沿うて34（一に44という）の県城を設けてここに守備兵を置き、更に騎馬の侵入を防ぐために、地勢を利用して長大な障壁を築いた。これが名高い万里の長城である。⁽³²⁾

植村は守備の必要性を示すために、後魏・北斉・隋・明など歴代の王朝による北方民族への防衛としての長城の造営が示されている。植村は堀とともに「北方民族防衛説」であるが、植村のその書ではもっぱら「防衛」にのみ力点が置かれている。ちなみに、堀の説では、「長城」が、北方民族と漢人の王朝との外交関係、つまり「通婚」や「冊封」などの対外交渉の一貫として位置づけられているからである。⁽³³⁾

上記の二つの説とは対照的な、つまり「万里の長城は、けっして民族の境界線ではありません」⁽³⁴⁾、というのが陳の謂いである。陳は北方民族に対する防衛としての「長城」を認めない。では陳は、長城を造営した目的はなにと判断しているのであろうか。陳の所説は以下の通りである。

長城内部に、農民も遊牧の民も住んでいたこととなります。やはり、長城というものは、当時の為政者が自分の勢力圏だと考えている土地を、塙で囲うような気持ちで築いたと解釈するべきでしょう。⁽³⁵⁾

「ねらい」があったとしても、そのねらいは崩され効果の点では立証できない。つまり、北方民族への防衛としての「長城」は役目を果たせなかった、というのは歴史的事実として確かである。堀・植村は長城造営のねらいを重視し、陳は結果において評価した。

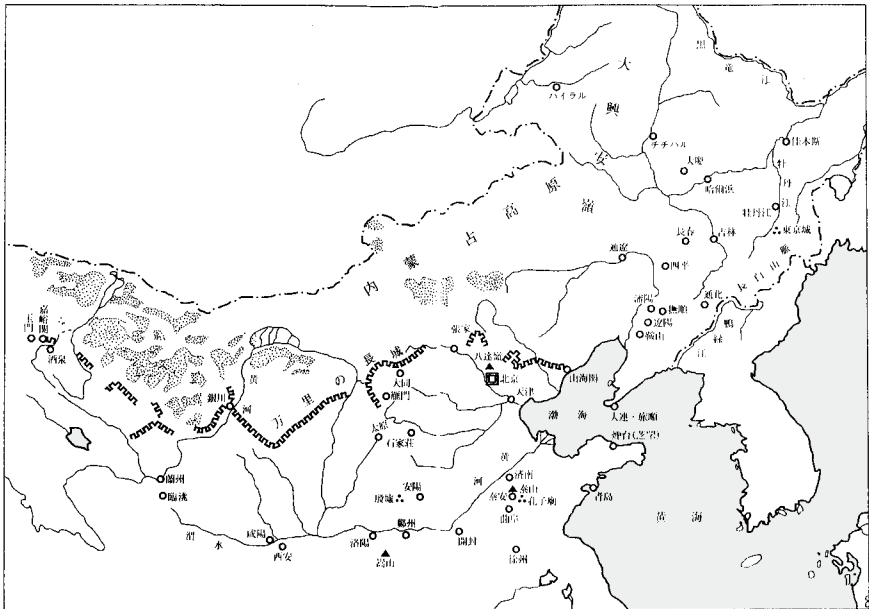
時間を生きることはその行動の結果を知ることができる、ただしそれは、時の経過の跡においてである。北方の領土の防衛において、漢・秦・明の漢民族王朝が長城の強化を図っている。国内の統一とともに、内外に向けた、とくに北方民族に対する権力の示威、つまり中国皇帝が他の異民族対して「君臣関係」を結ぶことへの強制である。その強制への示威が「長城」であるのは、「壁」によって自他を区別する伝統的な隣人関係作法に基づくからであろう。

明では長城は「へんしやう辺牆」と表象されたという。⁽³⁶⁾「しやう牆」は、『漢語林』によれば以下の通りである。①かき。かきね。ア、ついじ。土塙。イ、さかい。境界。間を

さえぎるもの。②棺のかざり。「牆」は麦などの穀物をしまう倉の象形という。その意味において、「辺牆」、つまり「長城」は身近にある「かきね」「土塀」「境界」の延長として、自他を区別させるそうした質的意義を有する巨大な城なのである。

だが、北方民族はかの長城をどのように、あるいは何と名付けたのだろうか。ここではモンゴル人の呼び方を紹介したい。

「長城」のことは、モンゴル語では、「オールド・ツァガーン・フルム」と呼ばれる。「オールド」は長い、「ツァガーン」は白い、そして「フルム」は壁である。つまり、長城は「長く白い壁」なのである。だが、長城は実際には



図一 万里の長城

出所：陳舜臣『中国歴史の旅』(上)による

「白く」はない。この「白い」とは、人骨の白さを指すという。⁽³⁷⁾

モンゴルの人は幼い頃からこの説話を聞いて育つ。長城は「長く白い壁」であると。そして、そこに人の骨が埋め込まれている、のだ。長城の营造は強制労働によって初めて実現できた。漢民族の歴代王朝による長城の修復・新設が膨大な死傷者を生み出したことは疑いない。その死者が長城の壁に塗り込まれている、と説話は教える。

4. 住まい—民居とゲル—

内モンゴル自治区の満州里市を訪ねる前に、山西省の省都太原市を訪れた。汾酒博物館と民間住居として保護されている「喬家大院」を調査することが目的であった。山西省の謂われは太行山脈の西を示すが、その高地の溪谷を縫って黄河がたゆたう。この省は、北には「長城」を挟んで内モンゴル自治区が、東には河北省、西には長安（現在の西安市）の所在する陝西省に挟まれる。この華北の地区を特徴づけているのは、北部の遊牧民族と漢人との抗争と和解の歴史である。

ここでは、太原市の「喬家大院」についてその遺構を概観したい。「喬家大院」は市の南方、^き祁県にある。入館者用の「案内書」の文面からエッセンスを抜き出してみたい。

喬家大院は、清朝の時代 乾陸の時期（1735-95年）に金融資本家で巨富を得た喬致庸の建てたものである。敷地面積約9,140m²、室の総数313室、大きな庭園6、小さな庭園20、民居の代表的な遺物である。1986年以降祁県の民族博物館として保存・公館されている。⁽³⁸⁾

「案内書」に書かれていないことは、その大院が女性をまるで「人形」のように扱ったことである。この豪邸では正妻のほかに数人の妾が、院のなかのそれぞれの家で暮らす。女性は物と同じように、主人の所有物に過ぎない。この院の主



写真一4 大院図 (撮影：豊田謙二)



写真一5 中庭 (撮影：豊田謙二)

人喬は太原市外の、現在の内蒙古自治区においても大きな土地などの資産を所有していた、という。⁽³⁹⁾

「大院」とあるが、もちろん「院」が基本である。その院について少し説明を加えたい。華北を中心に住居の建設は、中庭を中心に角型に囲む住居が「院」というひとつの単位、その院が複数構成されると「大院」と呼ばれる。ただし、当時も今も中国の女性が「家」に閉じ込められていたか、といえばそうではない。中国には「イエ」制度はなく、女性の独立性は保障されてきた。だが、家族における父親の権威は絶大であったという。⁽⁴⁰⁾

さて、モンゴル人は遊牧生活、漢人は農耕生活、その文化的対比は住まいにおいても対照的である。前者は移動に耐え得るもの、後者は定住に耐え得るもの、というわけである。以下ではモンゴルの人々の住まい、つまりゲルの機能的・文化的特性を描いてみたい。

ゲルの内部構造

2012年9月、幸いなことに内モンゴルの草原にあるゲルにおいて、モンゴルの



写真—6 ゲルの内部（撮影：豊田謙二）

人との食事会を催すことができた。とくに、モンゴル羊1頭を購入し、その美味を堪能でき、さらに食卓の楽しさを満喫できた。

羊の解体には基本的な作法が定められている。小刀一本だけでの作業だが、心臓に近い脇腹に手は差し込める程度の切り口を開ける。手を差し込み心臓に続く大動脈を引きちぎる。これで直ちに絶命する。次いで流出する血をボールに掬い出す。皮と肉の間に小刀を入れて開き、関節にそって肉を外す。腸は内部を洗い筋や肉に小片、血液を詰める。まず、羊に苦痛を与えず、羊の血を大地に落とさないこと、その血は腸に詰めて完食するのである。調理はシンプル、お湯の鍋で煮込み食の直前に塩を合わせる。骨付き肉を味噌につけて食す。皮はゲルの防寒のために、あるいは販売する。骨は犬が待ち構えている。

肉食の伝統は見事な合理主義に貫かれている。捨てる部分がないような解体・食卓の合理的作業なのである。ゲルの中心にはかまどが据えられている。その燃料のすべてが家畜の糞である。とくに火持ちのいいのが牛糞だという。冬季にはマイナス30～40度の過酷な条件に見舞われるので、凍死を避けるには家畜の糞を蓄積しておかなければならない。



写真—7 羊の解体 (撮影：豊田謙二)

ゲルはモンゴル人の遊牧生活における家である。「遊牧」と断ったのは近年「定住」化が進行しているからである。遊牧は移住であるが、その移住の目的は家畜のための牧草、その質に関係している。地球温暖化は牧草を枯らすなどの深刻な影響を生み出している、という。たとえば、「馬乳酒」、モンゴル人には欠かせない飲料なのであるが、馬の牧草が枯れ、馬の飼育が不可能になったという。その馬乳酒、チンギス・カン時代にも常食であった。たとえば、『モンゴル秘史』には以下のような記録が残されている。

家の目印は、生馬乳を皮袋に注ぎ入れて熟馬乳をよもすがら日の明くるまで醸す音であった。⁽⁴⁾

それぞれのゲルのなかで馬乳酒が造られていた。子どもから老人まで、日常的に愛飲されていた。遊牧生活には野菜が欠ける。とくにビタミンCをどうして補給しているのか、極めて興味深い点である。その解決のひとつは「馬乳酒」であ



写真—8 アルヒの蒸留（撮影：豊田謙二）

出所：国立民族博物館所蔵

る。「酒」とは言ってもアルコール度数は極めて低い。ゲルのなかに皮袋を下げ、そのなかで馬乳を攪拌しながら発酵させる。これは母親の仕事である。今日では、馬乳酒が不足しもっぱら「ミルクティ」が飲まれている。

家畜の乳を馬乳酒のように発酵させ、それを蒸留するとアルコール度数の高い蒸留酒、「アルヒ」が精製される。このアルヒの特性は、世界の蒸留酒のほとんどは穀類や植物であるのに、動物の乳を主原料にしていることである。しかも、ゲルのなかで蒸留しているのである。

5. 元王朝と漢人

モンゴル人は大地を耕すことを嫌悪した。遊牧の生命線である家畜の牧草を喪失させるからである。そのモンゴル人が漢人を征服して華北から江南、さらに華南へと侵攻して、先ず「金朝」、最終的には「南宋朝」を倒し、国号を「元」(1271年)と宣言した。その政治体制は商業中心の反農耕の治世である。以下、とくに特徴的な二点に絞って紹介しよう。

その前に一言、農耕の嫌いなモンゴル人に対抗して農業者を支えつつ、それを税の納税者として位置づける才覚者が、とくにチンギス・カンの側近にいた。女真族の金王朝に仕えていた耶律楚材である。チンギス・カンが金の中都を落とした(1215年)時、彼はモンゴル軍に降下した。チンギス・カンは死の床(1227年)で耶律楚材を幕僚に採用し、のちに「中書令」の職に就けた。いわば、彼は宰相であり軍務と対照化される内務・行政職である。彼は遼朝の創建者、耶律楚阿保機子孫であり、10世紀初め契丹族を統合し皇帝と称した。

元朝では、「腹裡^{ふくり}」たる河北・山東・山西以外には「行中書省」が置かれ、地方に軍事・行政などの広範な権限が与えられた。⁽⁴²⁾また、政治的身分については「蒙古人・色目人・漢人・南人」による上下の順位がつけられた。「色目人」とは西域人、ウイグル・ペルシャ・アラブなどの人を指す。元朝はとくにこれら商人を遇し、治世での経済・財政を担当させた。さらに、金朝の領土にいた漢族を「漢人」とし、南宋下の漢族を「南人」と区別して、漢族の団結を回避しようとした

のである。⁽⁴³⁾

征服王朝は漢化される、という歴史的現実のなかで、元朝はモンゴル文化に固執し、公用語はモンゴル語・モンゴル文字を貫いたという。また、儒学を基にした官僚養成の「科挙」制度を廃止したが、それは漢人の伝統的な人生目標をひっくり返すことでもあった。たとえば、その漢人の序列は以下のように意識されていたという。

官・吏・僧・道・医・工・^{しょう しょう じゅ かい}匠・娼・儒・丐⁽⁴⁴⁾

「丐」はかいと読み、「乞食」を意味するが、「儒者」はその一つ上に過ぎず、さらに「娼」（娼婦・俳優）の下である。ここにはまた、「農」が見えないのである。遊牧は農耕ではない。農産物が必要であれば、貨幣にて購入すればいいことである。貨幣は、羊などの家畜の換金化で賄える。遊牧を生活の基本とする限り、牧地を農地化することはモンゴル人には許されないことなのである。

6. ゲルの秋から冬—結びに代えて—

「ゲル」の敷居

ゲルという遊牧モンゴル人の住まいについて、すでに概観した。ここでは、そのなかの一つ、モンゴル語で「ゴシュ (gaoxiu)」, つまり「敷居」について考察してみたい。

「ゴシュ」はゲルのウチとソトとの境界にある。その境界を超えるにあたっての作法は厳しい。まず、右足から超えること、足を置かないこと、速やかに超えること、それを守らないと不幸に襲われる、という。だとすれば、敷居という「境界」は特別な意味を有しているように思える。その解釈には綿密な調査を必要としているが、ここではドイツの哲学者ハイデガーの言説を借りつつ解釈を試みてみたい。

敷居は外と内という二者が相互に通い合う中間を支えている。つまり、敷居は二者の「間」を支えている。そして、この間において内へ外へと互いに通い合うものは、「間」のもつ信頼性に応じて繋ぎあわされる。⁽⁴⁵⁾

敷居を渡る作法を無視するものは、この「敷居」という裂け目に転落する。裂け目はまた結び目でもある。「人間それ自体が線」であるからだ。「敷居」は「線」であり、人間それ自体でもある。「敷居を踏むことは家主の頭を踏むこと」、モンゴルの人はそう言い、またぎ続けることもタブーとされる。

客人の訪問はゲルの外で受け、家主は挨拶後にゲルに招き入れる。敷居を超えて正面が「ホイモリ」(=奥)、ここに家主、あるいは大切な客人が座る。その場は仏(=チベット仏教)の場である。「ホイモリ」に向かって右手に男性、左手に女性が座るが、「ホイモリ」から出入り口に向かって若いひとが座る。⁽⁴⁶⁾

冬営地こそ遊牧

ゲルは遊牧生活のためにこそ改良を加えられてきた。外からの攻撃に耐え、運搬での軽さ・丈夫さ、組み立てやすく、強風に耐え、冬の寒さを越せること、そうした難題を克服してモンゴルゲルは伝えられてきた。厳冬での遊牧は極めて過酷である。遊牧の周期は家畜の世話を中心に組み立てられている。春は2ヶ月、夏は長期に留まる、秋は冬営の準備である。

春は誕生した仔羊の去勢の仕事に追われる。去勢はより強く優れた種オスだけを残し、羊群の質の向上に向けるのである。遊牧で生きる牧民にとって非常に重要な仕事である。夏からは冬の準備がはじまる。まず「白い食」、つまり乳製品の確保である⁽⁴⁷⁾。次いで「赤い食」、初冬にさしかかると一冬のための羊肉の確保の準備が始まる。この作業は二つの家の分業で進められる。肉と内臓・血液の腸詰がゲルのそとで凍結される。この食料は、翌年5月頃まで持ちこたえねばならないのである。

ゲル内の暖房の確保は生死に関わる。問題は燃料の確保である。羊舎には毎日

大量の糞が生まれる。ストーブの燃料には凍結したその「ホルゴル」(=羊糞)が最適という。⁽⁴⁸⁾もう一つ、塩運びの労働がある。塩の湖の「硝土塩」を切りだしゲルまで運ぶのである。これを羊舎の傍らに積んでおくと、遊牧先から帰った羊はわれさきにその塩をなめ続けるという。

草原の賦

内モンゴルのゲルにおいて、モンゴルの人との交歓の時を持ち得た。私たち客人は「奥」に、モンゴルの人は7～8人、それでもゲルのなかに収まるのでその室内は印象よりも広い。中心料理はモンゴル羊一頭の「ツァナサン マハ (=塩ゆで肉)」、それに生野菜、酒はアルコール38度の「白酒」、これをストレートで乾杯する。これは穀物酒、モンゴル伝統の乳の蒸留酒「アルヒ」は飲めなかった。

その宴会で謳われたモンゴルの人の民族歌、その一部を紹介して小論の「むすび」としたい。

フンを燃やすと けむりがでて
 遊牧の家に生まれた私
 大草原を自分のふるさとと思っています
 生まれたこの草原を自分と思っています
 きれいな水を母の乳と思っています
 この人はモンゴル人です
 このふるさとを愛しています (仁欽訳)

食し、歌い、遇す。草原はモンゴルの人の母なる大地、母はもっとも大切な人。父は敬う人、母は愛する人。モンゴル羊を食したが、臭みどころか甘い香りに驚嘆した。食す直前に鍋に岩塩を加えるだけの調理ではあるが、その旨味は絶品とあっていい。この地の羊の食するのは草原に育つ「ハーブ系」の草という。これで、私の羊肉の嫌悪感は全く払拭されたのである。

敖包相会 (デュエット)

満月がでています

表裏にはくもりがない

愛している あなたを

いつも待っています

待っている あなたを

いつか来てくれるでしょう (仁欽訳)

この歌は、モンゴルの人だけでなく、中国の全土で大ヒットした歌という。まさに、中国の国民歌なのである。

さて最後に、遊牧と農耕とは相互依存の関係なのであり、文化としての上下関係を許容しない関係なのである。小論は遊牧と農耕を対照的文化として論じることを企図したものである。

文化の出発点が耕すことであるという認識は、西欧の学会が数百年にわたり、世界各地の未開社会に接触し調査した結果、あるいは考古学的研究、あるいは書齋における思索などを総合した結論である。(中尾佐助『栽培植物と農耕の起源』⁴⁹⁾)

上記、中尾佐助の「文化」に関する記述は筆者とは見解を異にする。筆者は「栽培植物」に関する専門知識を持たない。ここに引用して読者の判断に委ねる次第である。

注

- (1) 『新版漢語林』大修館書店, 1994年, 656頁
- (2) 堀敏一『中国通史』講談社, 2000年, 127頁
- (3) 渡辺武信『住まい方の実践』中央公論社, 1997年, 238頁

- (4) 同上, 241頁
- (5) NHK取材班『大モンゴル』1992年, 113頁
- (6) 村上正二訳注者『モンゴル秘史』1, 平凡社, 1970年, 78頁
- (7) 同上, 81頁
- (8) 藤公之介編著『モンゴル大草原101の教え』一満舎, 1998年, 10頁
- (9) 陳舜臣『中国五千年』下, 講談社, 1989年, 183頁
- (10) 『モンゴル秘史』1, 前掲書, 212頁
- (11) 同上, 212頁
- (12) 『モンゴル秘史』2, 前掲書, 344頁, および『大モンゴル』前掲書, 18頁を参照。
- (13) 『大モンゴル』, 前掲書, 18頁
- (14) 『モンゴル秘史』2, 前掲書, 345頁
- (15) 陳舜臣『中国五千年』下, 前掲書, 179-186頁
- (16) 同上, 208頁
- (17) 松井健『遊牧という文化』吉川弘文館, 2001年, 11頁
- (18) 張承志『モンゴル大草原遊牧誌』(梅村坦編訳, 朝日新聞社, 1986年)とくに, 135-156頁を参照。
- (19) 同上, 64頁
- (20) 同上, 120頁
- (21) 中尾佐助『栽培植物と農耕の起源』岩波書店, 1966年, 3頁
- (22) ジャック・アタリ『所有の歴史』(山内昶訳 法政大学出版局, 1994年, 33頁
- (23) 中尾佐助『栽培植物と農耕の起源』前掲書, 66頁
- (24) 同上, 62頁
- (25) 堀敏一『中国通史』前掲書, 66-70頁
- (26) 川本芳昭『世界史のなかの諸民族』山川出版社, 2004年, 7頁
- (27) 同上, 8-9頁
- (28) 陳舜臣『中国歴史の旅』上, 集英社, 1997年, 69頁
- (29) 同上, 59-60頁
- (30) 同上, 58頁
- (31) 堀敏一『中国通史』前掲書, 47頁
- (32) 植村清二『中国史十話』中央公論社, 1992年, 48頁
- (33) 堀敏一『中国通史』前掲書, 126-146頁
- (34) 陳舜臣『中国歴史の旅』(上), 前掲書, 62頁
- (35) 同上, 61頁
- (36) 同上, 61-62頁
- (37) 内モンゴル自治区の出身, 烏雲塔娜女史(農学博士)の談による。

- (38) 「喬家大院・百寿園」中国ゆう政, 2009年
- (39) 莫邦富『中国全省を読む地図』新潮社, 2001年, 38-45頁
- (40) たとえば, 大島立子「元代における女性と教育」(中国女性史研究会『論集 中国女性史』吉川弘文館, 1999年所収) を参照されたい。
- (41) 『モンゴル秘史』 I, 前掲書, 127頁
- (42) 堀敏一『中国通史』前掲書, 274頁
- (43) 『中国史のなかの諸民族』前掲書, 43-45頁, および『中国五千年』下, 前掲書212-215頁を参照。
- (44) 陳舜臣『中国五千年』下, 前掲書, 213頁
- (45) 合田正人『レヴィナスを読む』筑摩書房, 2011年, 303頁
- (46) 烏雲塔哪「モンゴル民族の食住文化—内モンゴル東北地方を中心に—」『地方自治ふくおか』第57号, 2013年) を参照されたい。
- (47) 『モンゴル大草原遊牧誌』前掲書, 89頁, 以下「冬营地」については136-152頁の記述に負う。
- (48) 同上, 142頁
- (49) 中尾佐助『栽培植物と農耕の起源』前掲書, iii頁。